エッセイ

『砂漠の国の柔道場』　『第二話』現地社会が受け入れた柔道活動

岡本文夫　（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

写真①　町の最大行事カフジ・マラソンで柔道デモンストレーションを披露した

筆者がアラブの地で柔道指導を始めた動機は、柔道を通じたアラブ人との交流の深化にあったことは前章で述べた通りだが、実はもっと深い目的があった。

太平洋戦争の敗戦後以外には他国の進駐や植民地経験を経ずに今日に到っている日本人は、言葉や社会慣習のバリアを乗り越えて外国人と接するのがうまくない傾向がある。初めての海外が、我が国外交官ですら苦手とするサウディアラビアとクウェイトであった筆者にとって、異文化との邂逅はカルチャーショックの連続であった。

一回目の現地赴任は、まだ子供が幼かったおかげで、家族を帯同することが可能だった。現地当局のダルワークのせいで、呼び寄せるのに７カ月半もかかり、ダハラーン空港に妻と二人の子供を迎えた時は感激だった。

可愛い長男には、将来において筆者が感じたカルチャーショックには無縁になるよう、異文化と接するハウツウを体得させたいと考えて、柔道の稽古には毎回連れて行った。５歳になるのを待って、妻には筆者の体操服をほどいて柔道着を縫わせた。

柔道指導が人気を呼び急速に入門者が増えたので、体重 100kg もある大人と小中学生が 40 畳しかない狭い道場で一緒に稽古していたのでは大けがさせる恐れがある。そこで、安全対策として稽古は大人の部、少年の部、子供の部に分けることにした。更には、「ミスター岡本は、柔道ばかりやって、何で空手をやらないんだ」という頓珍漢な要望にも接した。筆者の場合、余技ではあるが松濤館流空手道も齧っており、素人ではなかったので、それじゃあ空手もやるかということに。その結果、週 4 日汗を

流すことになったのだが、すべての稽古に長男を連れて行った。
稽古の初めには、一列に正座させた弟子の先任者の掛け声で「Sensei ni rei！（先生に礼)」と挨拶させて、稽古の終わりには『Seiza (正座)、Mokusou(黙想)』。
そして、その日の稽古について英語で訓話する父親の姿を長男に刷り込んでおきたかったのだ。将来、長男がどのような職業に就くかは知らないが、この幼児体験が外国との触れ合いに何の精神的抵抗がないように育ってくれるように願った訳だ。
どの稽古日にも連れ出す長男は最年少の存在でもあり、師範の息子だということで人気者になり、弟子たちからは大変可愛がられた。
鉱業所では約 130 人の日本人が勤務しており、その内子供が幼い 20 数世帯が社宅エリア（Family Quarter）の住人だった。因みに、幼稚園・小学校までは、明星学園（府中市）にお願いした分校を構えており、教師 2 名が派遣されていた。
しかし、社宅エリアはアラブ人居住者で大部分が占められており、日本人はマイノリティでしかなかった。日本人社会における最大の悩みのひとつが、アラブ人の悪ガキによる日本人子弟へのイジメだった。最悪の例は、空気銃で狙われた事件もあった。幸いなことに我が長男は、イジメの被害とは全く無縁であった。道場で触れ合う弟子たちが大家族で住まいする家に帰って話をするから、筆者が知る以上の多くのカフジの住人が筆者と長男の存在を承知していた。稽古のない日に、筆者が帰宅すると、時々長男が嬉しい報告をしてくれた。
「お父さん。誰だか知らないけど、アラビがボクの頭を撫でてったヨ」。
柔道指導のボランティア活動に対するこれ以上ない程の報酬ではないか。

柔道の指導は、完全ボランティアで行った。
入門者は、必ず入門料と月謝はいくらかと質問してきたが、特に子弟を稽古に通わせる父親にこの傾向が強かった。
「料金不要。沢山のアラブの皆さんと柔道を通じて交流出来ることが、自分の喜びであり報酬なのだ」と答えると、「ホウッ！」と両手を上げる大げさなジェスチャーをして謝意を表してくれたものだった。
信用の高まりを現わす二つのエピソードを紹介しておこう。
ひとつは、アラブ人小学校から彼らの運動会におけるエキシビジョンとして柔道指導のデモンストレーションを依頼されたことだ。
アラブ人小学校の高学年生 30 余名が我が道場の弟子だったので、学校当局が発想したのであろう。かくして、大人の弟子たちの協力により、40 畳の畳をトラックで校庭に移設して、筆者は唯一の日本人弟子の長男も連れて、アラブ人小学校へ向かった。現地の社会慣習に則って、両親の参観は男性席と女性席が画然と離れて設置されており、各 100 名を超える盛況を呈していた。勿論、女性陣は真っ黒いアバーヤをすっぽり被り、顔から足首までも見せない謙虚ないで立ちで座っていた。異性には一切顔を見せずに、黒いレースを透かして内側から外を見る社会風習なのだ。
道場の中での稽古は、一列になって座礼に始まり座礼で終わるのがルールである。

これはイスラームの礼拝（Sarah）に形が似ている。Sarah はメッカの方向を向いて行われるが、柔道の座礼の場合は師範に対して行う。アッラーの神に対して不敬だ！という誤解を生む恐れがある。従って、デモの開始は立礼で行った。司会進行役の紹介に従ってデモに入ろうとした時、父親席から何やら怒号が飛んでざわつき始めた。依頼に従って協力してあげているのに、不穏な雰囲気に気分を害した時、騒ぐ父親の指す先を見て理由が解った。長男の英一郎もデモに参加するので、妻が 4 歳の娘の手を引いて参観に来ていたのだ。地味ながらも日本人女性として普通の姿をして日傘をさす様が、現地人社会のタブーに触れていた訳だ。

そこで、宗教的教養の深さと高徳を以って現地人社会の尊敬を集めているイブラヒム・カリール副所長が立ち上がって演説を始めてくれた。アラビア語は解らないが、こう言ったに違いない。

「あそこにおられるのは、ミスター岡本の奥さんと娘さんだ。今日のデモには息子さんまで参加してくれているから参観に来られたのだ。こんなに多くの我々の子供たちがミスター岡本に指導して頂いている。その感謝として、日本人の奥さんの参観は、今回だけの特例として認めようではないか」。

会場の静まりを確認した後で、ルーチン手順としてウォーミングアップから、打ち込み、乱取りと進めるのだが、子供たちが大外刈りや背負い投げを掛ける度に筆者は大きく飛んで受け身を取る。そのたびに父親席は大騒ぎして喜ぶ。多分、こう言っていただろう。「オイッ、見たか！今、師範を投げ飛ばしたのが、俺の息子ムハマッドだっ！」

かくして、デモ開始時の不愉快な騒ぎとは裏腹に、参観者たちの大拍手を以ってデモは終了した。

田舎町の最大行事は、カフジ・マラソンである。国技がサッカーであるお国柄、サッカー場だけは町に不相応なほど立派なものがあった。これを会場とするマラソンは、選手たちをバスで 18 キロ北のクウェイト国境まで運んで、片道コースで行われる。往復コースだと、アッラーの神の啓示が下ったと感じたなら、途中でショートカットして折り返してしまう選手が出るかもしれないからだ。

従って、3 千人を超える大観客は、いつ選手がスタートして、いつゴールするかハッキリ解らずボーッとして待つという間延びした大会運営となる。そこで、ローカル・ガバメントが筆者の柔道デモによって空き時間を有効に埋めようと企画したようで、鉱業所の政府関係部経由正式に招請状が届けられた。

かくして、大人の部と少年の部の優秀弟子を 5 名ずつ選び、40 畳の畳とともにサッカー場に赴いた。相手は、柔道と空手道の違いも知らない素人ばかりだから、デモンストレーションの進行に合わせたナレーションを英語で準備して、これをロンドン留学帰りの真面目な部下ムゼイニーにアラビア語に翻訳させた。

素人の観衆ばかりだから、デモの内容は大受けするであろうもので構成した。ウォーミングアップでは、ヘッドブリッジで反対側にピョンピョン飛んでみせる。大人の

部の弟子相手の五人掛けでは各種の技で投げ飛ばすし、少年の部の弟子相手の五人掛けでは、こちらが散々投げ飛ばされる。

観衆の「ウォー！」という反応を楽しみながらデモが進行したかといえば、必ずしもそうは行かなかった。マイクを握ったナレーター役のムゼイニーが、東部州知事やカフジ地区のガバナーや 3000 人を超える大観衆を前にして、完全にあがってしまった。準備したナレーションが早々に終わってしまって、動作とシンクロしない。

そこで、デモを中断して、「おいおい、お前、どこを読んでいるんだ。これから背負い投げをやるから、この行からこの行までをもう一度読んでくれ」との調整を必要した。

深い興味を感じた観衆が客席から降りて来て仮設畳の周囲に集まってきた。

演技終了して一列に並んで挨拶する我々には、東部州知事始め VIP 方は惜しみない拍手を以って応えてくれた。弟子たちにも光栄な体験と思い出深い記憶になったに違いない。

写真②　アラブ人小学校でのデモンストレーション
筆者を大外刈りで投げたのは唯一の日本人弟子・長男英一郎

おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued